

真中朋久歌集

『cineres』

(六花書林)

二〇一四年から一八年までの作品をおさめた第六歌集。

地下空間あかあかとして開削部工区に降りてゆくひとのかけ

かすかなるみづのひかりのそのむかう起伏おきかは見ゆ君津木更津

いまここはたへがたけれどおもひかへすどこにももどりたいところなし

専門用語をまじえた硬質なびびきの歌が集中に多い。さまざまな土地が詠まれるものの、それは特定の場所への愛着よりも、むしろどこにも帰属感をおぼえられないひとり人間の姿を浮かび上がらせる。

遠くまで見ゆる日はこころ疼くゆゑ日の暮るるまで窓には寄らず

音楽こそ慰藉といふひとの音楽をしばらく聴きてわれは立ちたり

来し方も行く末もあるはおそろしく泡だちて寄せる水を見てあつ

おほかたは偽薬プラシーボなれど煎じ飲む湯のぬくとさは直接にして

気分の高揚や慰めに対する羞恥心ともいうべき距離のとり方。今を生きる徒労感。そのなかで詠まれた「湯のぬくとさ」が、ひときわこころに残る。(岩崎佑太)

柳原恵津子歌集

『水張田の季節』

(左右社)

人文科学の研究者・母親・歌人の三つの顔を持つ作者は、多忙な日常を丁寧にに生きようとす。しかし猛スピードで過ぎてしまう生活を、少し距離のあるところから力の抜けた柔らかいままざしで見つめる。

生きているだけでふたたび夏は来て抜け殻に似た棚のサンダル

怒りゆすりほつたらかして夜を手に入れる積ん読の論文のため

一見、目を引く歌に自嘲的なものも見受けられるが、研究者らしい分析的な歌い口は皮肉っぽくユーモラス。そんな出来事も自分の生活と、前向きに一つずつ収めているように感じる。

ブレーキが下手であったとなぜ舌は謝る追突をされたのに

いくらでも出る正論は食卓を家族に拭かせることすらできず

月並みな女の性であることの月並みな重石だったこの石

この世界における日常のままならなさ、頑張っているからと言つて報われない感じ、月並みだろうと大変な女としての務め。無機質な美を帯びた集合住宅の装画も、そんな柳原さんの世界観を象徴しているようだ。(岩館澄江)